

## 長期予後を見据えた虚血性心疾患治療の update

木村 一雄 横浜市立大学附属市民総合医療センター

主に冠動脈硬化を基盤として生じる虚血性心疾患患者は、高齢者の増加やライフスタイルの欧米化により増加することが懸念されている。この冠動脈硬化の発生機序やその病態は従来からの生化学的マーカーなどの検討に加え、分子生物学的手法を用いて明らかにされてきた。また、冠動脈造影に加え、IVUS(intravascular ultrasound), MDCT(multidetector-row computed tomography), MRI(magnetic resonance imaging), OCT(optical coherence tomography)などの画像診断の進歩により、この病態の本質である冠動脈壁の性状もより詳細に観察できるようになった。これらを踏まえて治療に至る概念も大きく変貌している。すなわち、冠動脈硬化は単に冠動脈の局所にとどまらず、冠動脈全体の病変の中でその一部が臨床的兆候の原因となっていること、また、冠動脈病変を有する多くの患者では全身の血管にも病的な動脈硬化が生じていることなどが証明されてきた。このため、全身の動脈硬化に関与する古典的冠危険因子である高血圧、高脂血症、糖尿病、喫煙に対し、上述の動脈硬化の発生機序を考慮した治療が重要とされてきている。最近、このような点から個々の冠危険因子に対して多くの薬剤に関する大規模臨床試験が行われ、その成果が臨床応用され有益性が示されている。しかし、これらの薬剤における心事故軽減効果は20~30%前後との報告が多く未だ改善する余地が残されている。また、欧米人を対象としたエビデンスが多数を占めることも念頭に置く必要がある。現状ではエビデンスを参考にしうえて risk/benefit を考慮し投与量、投与期間など個々の患者に応じた綿密な治療選択が望まれる。一方、インターベンションについてはDES(drug-eluting stent)の登場により再狭窄のかなりの部分は解決できるようになった。しかし、ハードエンドポイントである心臓死や心筋梗塞の再発予防には有効性は見出されていない。このように現状ではDESの有効性は局所治療に起因するものであり、再狭窄軽減により quality of life を改善することにとどまる。また、カテーテルインターベンションに比べ新規病変を含めより広範囲な病変への対応が期待できる冠動脈バイパスとの比較は今後も検討されるべきである。しかし、このような侵襲的治療を行った場合においても冠危険因子コントロールとしての薬物療法の重要性はいささかも低下するものではない。この分野の進歩はまさに日進月歩であり現状を知りうることは重要である。本特集では治療目標で最も大事な長期予後という観点から薬物療法、冠インターベンション、冠動脈バイパス術の最新の状況について各々の分野で活躍されている第一人者の先生方に投稿をお願いした。いずれもテーマに沿って確立したエビデンスの概要と筆者の見解が明確に述べられており是非一読していただきたい。